

## 第2章 調査対象の概要

## 第1節 文化的景観の位置及びその範囲

九州の東部、瀬戸内海に面した大分県中部の別府湾の最奥部に位置する別府市は、日本一の温泉地として知られている。温泉の総湧出量は約90,000ℓ／分であり、2位以下を大きく引き離し日本一である。加えて、源泉総数、泉質、高温源泉数、動力湧出量、利用泉源中の自噴泉数、温泉利用の公衆浴場数に関しても日本一で、他の追随を許さない。

別府市は大分県の東海岸の中央にある市で、人口約12万人、面積125.314km<sup>2</sup>で、大分県第二の都市である。東経131° 29' 37"、北緯33° 16' 52"、大分県の東部のほぼ中央に位置し、国東半島と佐賀関半島に挟まれた波静かな別府湾に面し、西側には由布岳、鶴見岳を中心にした連山と、東には瀬戸内海（別府湾）に流れ込む朝見川、春木川、境川などの河川により形成された扇状地、及び下流部の沖積平野からなる。扇状地の北部および南部は、断層活動により東西を横切るように短い断層が多数分布し、市街地はそれらの断層に挟まれた窪んだ地形に立地している。市を南北に貫通する形で海岸線沿いを国道10号、中央部を大分自動車道が通る。西部の山沿いは主要地方道11号別府一の宮線（九州横断道路）が通る（図2-1）。

このように、西側は火山地帯に近接し、島原-別府地溝帯上に立地しているという状況で、火山活動や地震など自然災害の影響を大きく受ける一方で、豊富な温泉水を市内各地で利用し、また温泉等に伴う噴気も地獄蒸しや湯の花製造などに利用しており、温泉資源を基盤にした生活や生業を営む社会的な特徴を有する。

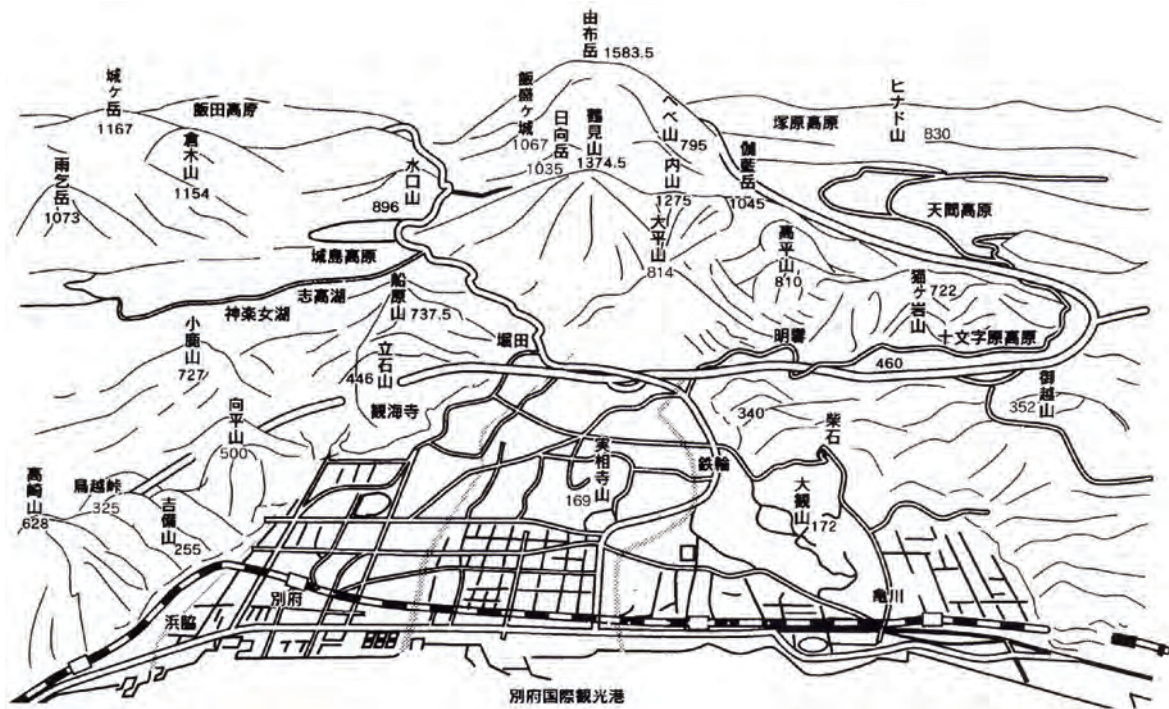


図2-1 別府市の地理的概要

(出典：恒松栖「湯の花の研究 -湯の花とハイノキで明礬をつくる-」2007年)

以下、調査対象としたのは、図2-2の着色で示す明礬温泉地区（西側）、及び鉄輪温泉地区（東側）の重要な文化的景観選定申出範囲である。

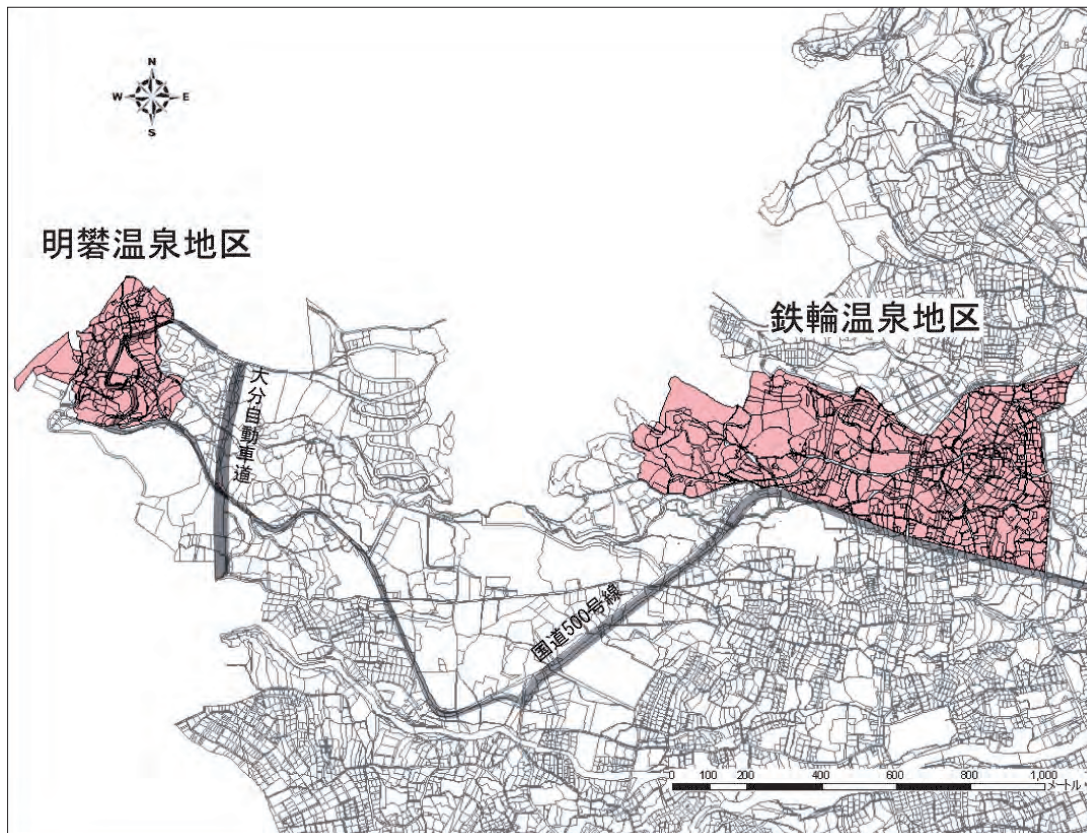


図2-2 対象地区

## 第2節 文化的景観の歴史と地名の由来

### 1 鉄輪温泉地区

鉄輪は古くから温泉を利用した保養地として利用されており、その歴史の長さから鉄輪の地名の由来に纏わる数々の伝説が残されている。2つほど以下に示す。

「鎌倉時代、建治二年の秋（1276年）時宗の開基一遍上人は諸国念仏観化の旅の道すがら、豊後の国、河直（鉄輪）を訪れた。ここで猛り狂う大地獄に苦勞する里人を救うため鶴見権現に産籠祈願の末、神の教示によって大小の経文一字ずつ記し投げ込み、一心に念仏を唱えたところ、大地獄が不思議と鎮まったといわれている。一遍上人はそこに「蒸し風呂」「熱の湯」「洪の湯」等をつくり、衆生済度の音泉保養地としこれが鉄輪温泉のもととなったといわれている。\*」

「杵築に住む平家の末裔である生地の玄番という豪族が、鉄輪の湯に入ることが何よりの楽しみで、大きな鉄棒を持ちドスンドスンと杖がわりに持ち歩いて、一日に一回必ず入湯に来ていた。ある日、玄番が入湯中に、城ヶ塚（今の貴船城のあたり）に住む源為朝がその場を通りかかり、ちょっとした悪ふざけをして玄番の鉄棒を土の中に押し入れてしまった。湯から上がった玄番は自分の鉄棒がないのに気づき、回りを探したが見あたらず夕暮れになってきたので気が焦り始め、やっと土の中に入っている鉄棒を探して、これはあの為朝の仕業だと腹立ち紛れに全身に力を込めてその鉄棒を引き抜いたところ、その抜けた穴（輪）から新しい湯が噴き出して来たのであわてて杵築へ帰ってしまった。その泉源から鉄の穴、つまり鉄輪という地名になったといわれている。\*」伝説の他にも、実際に古くから農閑期に疲れを癒すため長期滞在する農家の人々や、療養のための長期滞在の人々がよく訪れ、療養期間中は温泉の蒸気で蒸す「地獄釜」を使い自炊をしながらゆっくりと時間を過ごすことで心も体も療養できる。これらの癒しの文化が集積してきた地区が鉄輪温泉地区である。

（※部分は鉄輪旅館組合ホームページより引用）

### 2 明礬温泉地区

明礬温泉地区は「豊後明礬」の製造を、江戸時代より以前に日本で初めて成功させ、江戸時代には江戸や大阪に明礬会所（専売所）を幕府に作ってもらっていた。全国の明礬の生産と販売を仕切りほぼ独占的に扱っていたほど大々的に明礬製造を行い、この一帯が「明礬山」と呼ばれた由来にもなったと伝えられている。

明礬は、止血・皮膚消毒などの薬用をはじめ、皮革のなめしや製紙などにも利用される鉱物であり、火山活動の産物として製造される。明礬の利用の歴史は古く、ギリシア時代にも用いられていた。東洋の明礬は古くから中国で生産されて、日本も輸入に頼っていた。江戸時代、豊後野田山で生産がはじまり著名になると「和明礬」、中国からの輸入品を「唐明礬」と呼ぶようになった。元禄7年（1694）、豊前・豊後地方を旅行した福岡藩の学者貝原益軒は、『豊国紀行』の中で、別府での珍しい見聞を記録している。（参考文献：『別府市誌』平成15年版）



## 第3節 「原風景形成期」について

ここでは、本調査を行う際に用いる「原風景形成期」について述べる。

平成20年（2008）度の調査において、住民へのヒアリングや文献による歴史調査によって、重要文化的景観の特徴が築かれた期間を「原風景形成期」として抽出している。以下に鉄輪温泉地区・明礬温泉地区の原風景形成期について説明する。

### 1 鉄輪温泉地区

鉄輪温泉地区における原風景形成期〔明治43年（1910）～昭和47年（1972）〕に撮影された古写真を提示し、原風景の特徴を述べる。

鉄輪温泉地区の湯けむり原風景形成期は、その特徴によって大きく2つの期間に分けられる。湯治場を中心として発展した明治43年（1910）～昭和24年（1949）を「原風景形成期一期」、ボーリング技術が普及したことで湯けむりが数多く掘削され、遠景での湯けむり景観が見られるようになった昭和25年（1950）～昭和47年（1972）を「原風景形成期二期」と定める。

鉄輪温泉地区の景観を創出する重要な景観構成要素として、まず湯けむりが挙げられるが、原風景形成期一期に撮影された図2-3及び4を見ると、現在の遠景景観と比べ、湯けむりの本数が少ないことがわかる。原風景形成期一期の古写真で確認できる湯けむりは、地獄や温泉施設から発生するものがほとんどであり、現在の鉄輪温泉地区でみられる、装置からの湯けむりは見あたらず、自然発生によるものであると考えられる。自然発生の湯けむりは、明治43年（1910）から徐々に開園された観光施設である「地獄」から発生するものがほとんどであるため、鉄輪湯けむり原風景形成期一期は、現在の鉄輪湯けむり景観が形成されるきっかけとなった、重要な期間であると考えられる。

温泉施設については、現存する共同温泉及び、既に失われて現在は遺構として残されている共同温泉や温泉施設が、原風景形成期一期の時点で存在している。

また、鉄輪温泉地区は周辺が田畑で囲まれており、豊富な緑地が存在している。緑地帯の分布は地区の北から西に周辺をとりかこむように分布している。現在のいでゆ坂とみゆき坂を分かつ別府山香線付近にも小規模な緑地が分布している（図2-5）。

原風景形成期二期にあたる昭和40年（1965）前後に鉄輪地区でボーリングによる掘削が本格的に行われるようになった。図2-6より、原風景形成期一期よりも数多くの湯けむりが見受けられることが分かる。この期間に多数の湯けむり装置が設置され、現在の鉄輪湯けむり景観の原型が生まれたと考えられる。また、それまで鉄輪温泉地区東部を中心に発達していた湯治宿が地区全体に広がり、湯治宿から旅館へと変化する宿が現れた。大型旅館も次々と新設され、鉄輪温泉地区の旅館の棟数がピークを迎えた期間である。また、それに伴い農地が減少していることが分かる（図2-7）。

また、原風景形成期一期および二期を通しての特徴としては、図2-8及び図2-9から、原風景形成期では木造・白壁でつくられた寄棟屋根をもつ建物が数多く存在していることが確認できる。また、現在では建築基準法の改正によりほとんど見ることができない、木造3階建て以上の建物が多く存在しているということも大きな特徴である。風呂本地区にはこのような木造3階建て以上の建物が建ち並び、周辺は趣のある路地空間であったことが伺える。図2-8は現在の旅館「築新」の場所に存在していた筑後屋新館の古写真で、図2-9は現在の熱の湯前駐車場に存在していた大平屋の古写真である。



図2-3 原風景形成期一期〔明治43年（1910）～昭和24年（1949）〕の鉄輪温泉地区・遠距離



図2-4 原風景形成期一期〔明治43年（1910）～昭和24年（1949）〕の鉄輪温泉地区・中距離



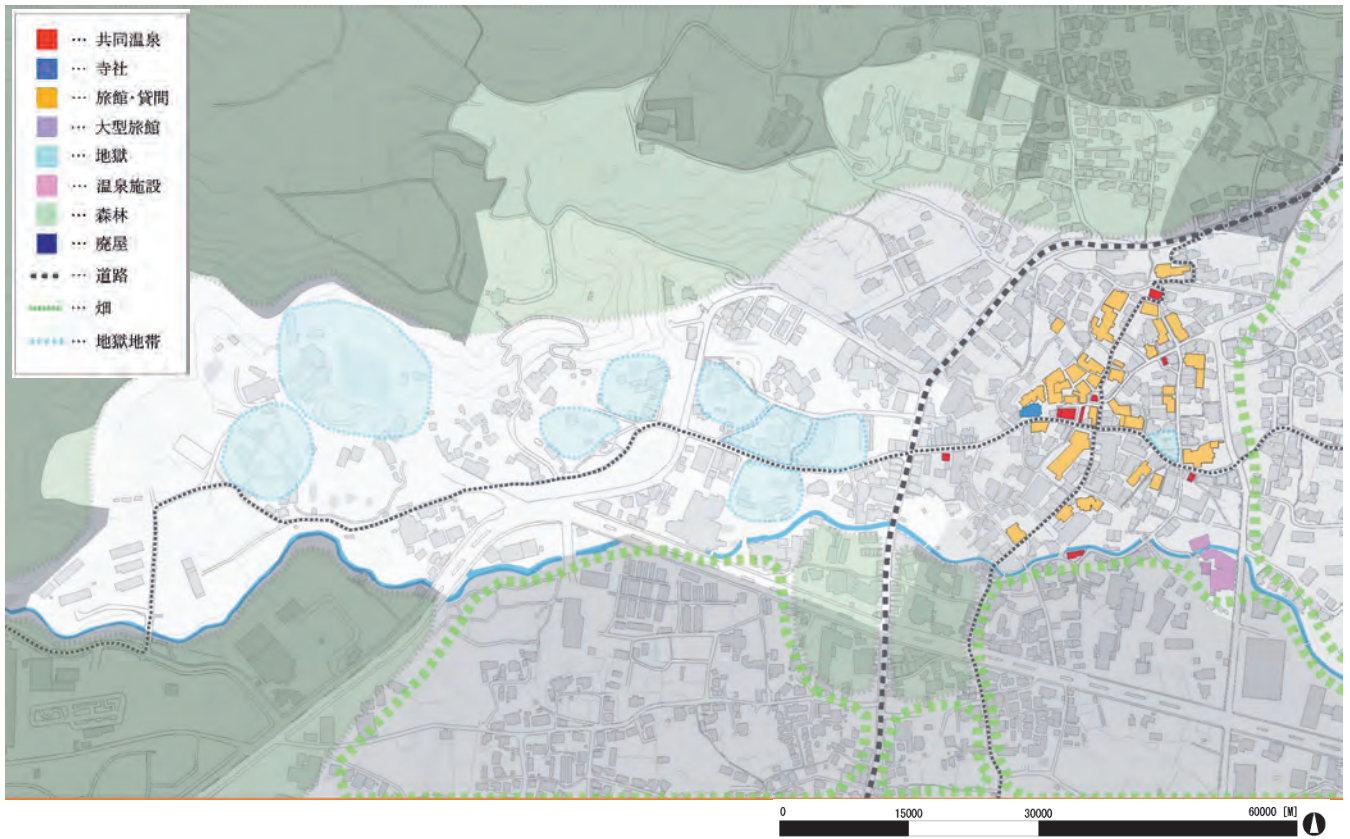


図2-5 原風景形成期一期 [明治43年 (1910) ~昭和24年 (1949)] の空間利用



図2-6 原風景形成期二期 [昭和25年 (1950) ~昭和47年 (1972)] の鉄輪温泉地区  
(出典：別府今昔風土記)



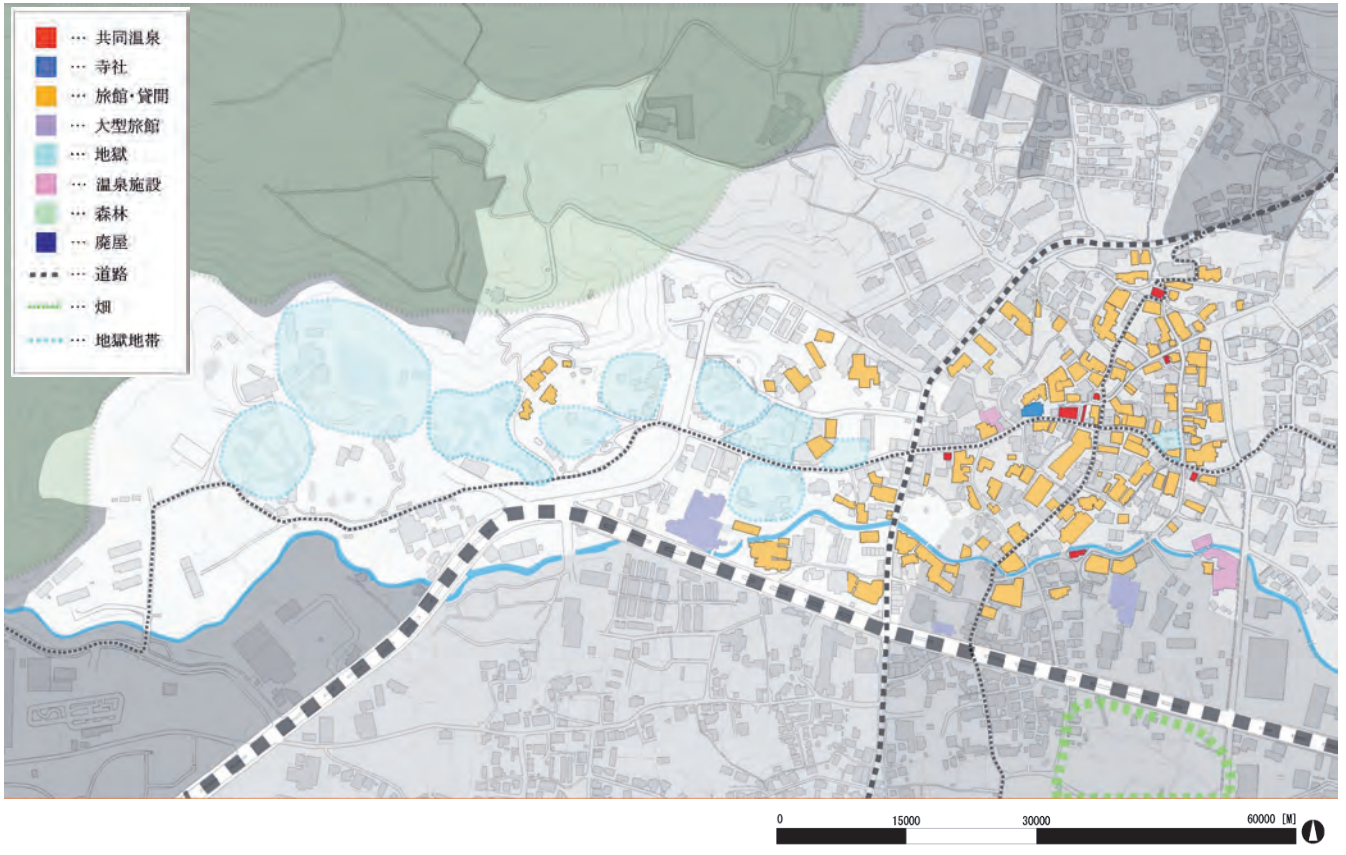


図2-7 原風景形成期二期〔昭和25年（1950）～昭和47年（1972）〕の空間利用



図2-8 原風景形成期〔明治43年（1910）～昭和47年（1972）〕の筑後屋新館の古写真





図2-9 原風景形成期 [明治43年 (1910) ~昭和47年 (1972)] の大平屋の古写真



## 2 明礬温泉地区

明礬温泉地区における原風景形成期〔明治18年（1885）～昭和11年（1936）〕に撮影された古写真を提示し、原風景の特徴を述べる。

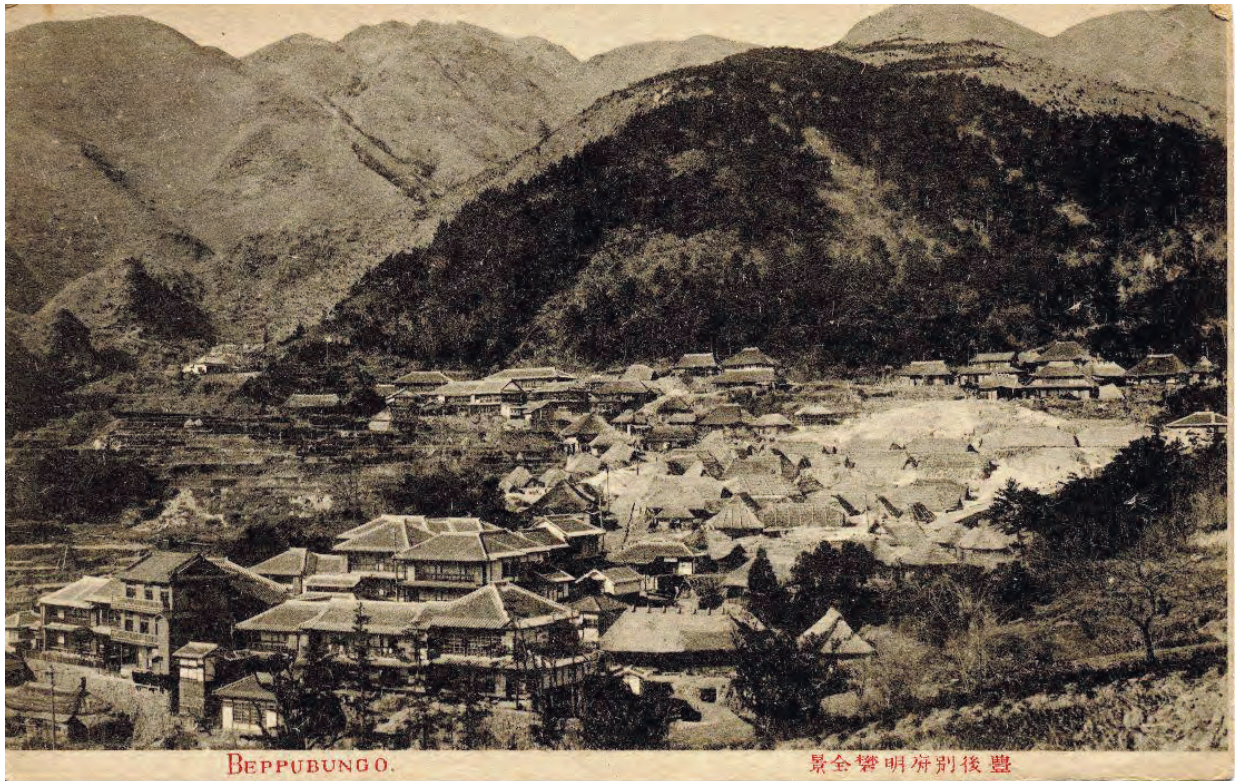


図2-10 原風景形成期〔明治18年（1885）～昭和11年（1936）〕の明礬温泉地区・遠距離



図2-11 原風景形成期〔明治18年（1885）～昭和11年（1936）〕の明礬温泉地区・中距離



図2-10を見ると、原風景形成期の明礬における遠距離景観での湯けむりは確認できない。しかし、図2-11の中距離景観では、「湯の花小屋」から立ちのぼる湯けむりによって創出される、湯けむり景観が確認できる。これは現在の明礬温泉地区においても同様の現象がみられる。つまり、明礬温泉地区における湯けむりの発生状況は、原風景形成期と現在では、景観を構成する「湯けむり」の性質の点で、大きな変化は見られないということがわかる。但し、同地区の主要な景観構成要素である「湯の花小屋」の増減は、明礬温泉地区の湯けむり景観に大きな影響を与えていると考えられる。

温泉施設については、現存する共同温泉が原風景形成期間には全て開設されており、これら「地蔵泉」「神井泉」「鶴寿泉」の3つの共同温泉を中心に旅館が分布していた。共同温泉の建物は板・縦張り壁であった。図2-12は原風景形成期間後期の地蔵泉の古写真である。また、原風景形成期では「薬師湯」と呼ばれる共同温泉が存在し、地蔵泉と共に、滝湯やむし湯を併設していた。

明礬温泉地区は鉄輪温泉地区と比較して旅館の入れ替わりが少なく、原風景形成期間に存在する旅館が、現在も継続して生業を続けているものが多い。原風景形成期では旅館棟数は最多であった。しかし、原風景形成期と現在の旅館棟数を比較すると、旅館棟数は半分以下となっており、原風景で旅館が存在した場所は駐車場や空き地へと変化している。

旅館の建物については、木造・白壁でつくられた寄棟屋根をもつ建物と、板張りの建物が数多く存在していることが確認できる（図2-13、図2-14）。階高は多くの建物が2階建てであり、現在よりも旅館棟数も多いため、岡本屋前から湯元屋前を取り抜ける明礬のメインストリートは、趣のある木造旅館が建ち並び、大変な賑わいを見せていた。

原風景形成期間の湯の花小屋の分布は図2-15の空間利用の地図に示す通りであり、現在よりも広範囲に「湯の花小屋」が存在しており、豊かな湯けむり景観がみられる。

周辺の緑地及び地形は、原風景と現在の景観ではほとんど変化がみられず、明礬温泉地区の景観は建物の形状と棟数、そして湯の花小屋の棟数により大きく変化するといえる。





図2-12 原風景形成期 [明治18年 (1885) ~昭和11年 (1936)] の地蔵泉の古写真



図2-13 原風景形成期 [明治18年 (1885) ~昭和11年 (1936)] の明響温泉地区・旅館群①





図2-14 原風景形成期 [明治18年 (1885) ~昭和11年 (1936)] の明響温泉地区・旅館群②

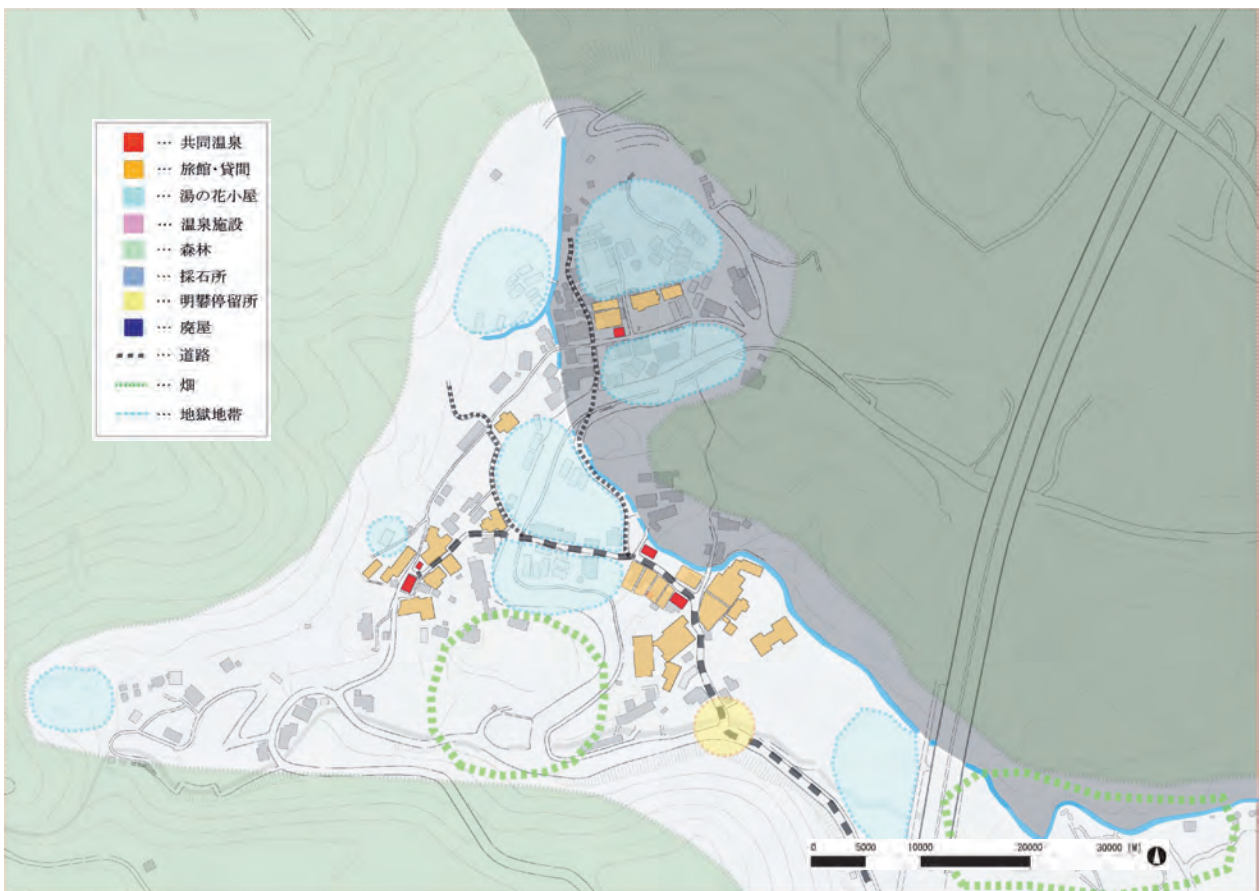


図2-15 原風景形成期 [明治18年 (1885) ~昭和11年 (1936)] の空間利用